

アドヴェント
カレンダー



——めくるめく日は過ぎて——

/* アドヴェント・カレンダーとはクリスマスを楽しみに待つために用意される特別なカレンダー。クリスマスまでの日数分のめくる場所が用意されていて、毎日ひとつずつそれをめくる。するとそこにはクリスマスにちなんだ絵がかかれていたり、小さなプレゼントが入っていたりするという趣向である。

この作品は私の所属する劇団（「個別劇団」）でクリスマス公演用に書いたもの。アドヴェント・カレンダーと同じように、一日一日を追っていく形で進行する。どろどろした愛憎劇もなく、大きな事件もなく、ほのぼのとした一ヶ月。音楽やダンスを交えてミュージカル調、オペレッタ調にして上演するとほのぼのの感が増して大変良いと思われる。 */

/* ギミックの都合で転換が多くなっているため舞台の構造をどうするかが重要だ。作家の部屋（コタツやワープロがある） 兄弟の居る家（おたくの部屋 受験生の部屋）そして教会（道 庭先 内部 告解室 倉庫のドア クリスマスツリー）それぞれの表現について詳細は演出家にお任せするが、額縁舞台に立体的に部屋を配置して、全体がアドヴェント・カレンダーの絵のように見える、そんな大掛かりな舞台装置が望ましい。すると、アドヴェント・カレンダーをめくっていくワクワク感を各日付毎にどの部屋に焦点が移るのか、という部分で表現していける。 */

/* 通常 アドヴェント（降待節）はクリスマスの4週間前から始まるのだが、日本のアドヴェントカレンダーは11月28日からではなく、12月1日から始まるものが多い。その場合 {30日と1日と2日} {3日と4日} を一日分としてそれぞれまとめると良い。 */

使われている記号について

/* 説明やト書き */ 説明やト書き

_____/ *場面* / 場面転換

◆『章の見出し』日付 曜日 日付の変わる場所

背景・舞台

どこか小さな教会のある小さな街。

登場人物 動物

神父・・・謎の男に変装して押しボタンの付いた箱を配っている。話が長そう。

作家・・・男性。ミステリー作家。猫2匹の飼い主。

編集者・・・女性。2児の母。夫とは死別。

おたく（兄）・・・夜中はパソコンを触っている。

受験生（弟）・・・夜中は勉強している。

黒猫・・・クロちゃん。舞台の進行に必要。どちらかといえばツッコミ役。

白猫・・・シロちゃん。進行に必要。どちらかといえばボケ役だった。

竜太郎・・・犬、小説内では刑事。

ハト・・・平和そのもの。小説内では近所のうわさ好きのおばさん。

◆『シロとクロ』11月28日 金曜日

/*作家の部屋*/

/*個別劇団の公演時には黒猫と白猫の役者のアドリブを交えて進行していました。*/

黒猫：吾輩は猫である。

白猫：にゃん。

黒猫：名前は未だ無い。

白猫：えー、あるよ、あるよ、あるよー。名前。

ミステリー作家である、ご主人様が、

考えに考えて付けてくれたミステリーらしい名前。

私がシロ。あなたはクロ！

黒猫：シロちゃん、ご主人様は何ーんも考えてないと思うよ。

白猫：えー、考えてるよ。とーっても、ミステリーっぽいじゃん、シロとクロ。

黒猫：面倒くさいから見た目をそのまま付けただけで、

ミステリーとか関係ないと思うよ。

白猫：仕方が無いよ。ご主人様は忙しい人なんだし。

/*コタツに向かってずっと暇そうな作家*/

黒猫：そうは見えないけどね。

白猫：そんなことないよ。（そうって、ご主人様を見るけど忙しそうではない）

身体は動いてないけど、その分 あたまの中がすごい勢いでいっそがしいんだよ。

もう、いろんなことを考えてるんだよ。ふつーの人には思い付かないような、

ふかーいふかーい考えが、これまた散らかし放題のこの部屋のように

散らばっているんだよ。ご主人様はこっちの引き出しからアイデアを取り出し

あっちの押入れからアイデアを引き出して、（自分が忙しく動きながら）

組み立て組み上げて、めまぐるしく・・・

だから、忙しいんだよ。もう、猫の手も借りたいくらいに。

黒猫：だったら、シロが手、貸してやったら？

白猫：うん、わかった！え、え、えーっと、ごみを捨てる。（捨てる）

黒猫：そんだけ？

白猫：それから、・・・・・・日めくりをめくる。（めくる）

作家：ふう、日付が変わってしまった。寝るか。

白猫：ええっ、寝ちゃうのー。夜はこれからなのー。

◆『日が変わった瞬間の他の人』 11月29日 土曜日

————— /*受験生の部屋*/

/*一心不乱に勉強している受験生*/

受験生：ああ、もう日が変わってしまったよ。今日の分、終わってないのに。

白猫：このひと、いつもこうだよな。

黒猫：勤勉だよな。

白猫：うちのご主人様と違うよね。

黒猫：それは言っちゃ駄目だって。

/*猫たち移動*/

————— /*おたくの部屋*/

/*オタク、パソコンでネットサーフィン中*/

おたく：やっぱり、彼女にするならネコミミがいいよなー。

白猫：このにいちゃん 指の動きすごいよね。猫にはとてもマネできないよ。

黒猫：そうか？（黒猫、実は携帯電話を操作している。メールを打っているらしい。）

白猫：クロちゃん！ なんで機械いじっての。

猫としての誇りをわすれちゃったの？肉球なくなっちゃうよ。

おたく：ん？よっしゃー、2げっとー。ずざー。 （パソコンをうつ）

/*猫たち移動*/

————— /*教会内部*/

/*ギターを爪弾く神父 あるいは テレビアニメを見ている。 */

神父：

黒猫：帰ろっか。

白猫：そだね。

/*猫たち移動*/

◆『次の日？ネタが無い』 11月30日 日曜日

————— /* 作家の部屋 */

作家：ふうう。よく寝た——さっぱりだ——。

黒猫：やっと、起きたよ。

作家：しかし、ほんと、さっぱり、ネタが無い。ははははは。

白猫：ご主人様、自分で乾いた笑いしてる。

作家：ああ、いつまでもこんな調子だと、幸子さんに怒られちゃうよ。

白猫：クロちゃん、クロちゃん、今日、幸子さん来るの。

黒猫：来るんじゃないか。年末進行で出版関係は忙しいんだよ。

白猫：年末進行ってなに？

黒猫：しらねえよ、そんなこと。

◆『編集者・幸子』12月1日・月曜日

————— /* 道 */

/*電話をしている編集者*/

/*白猫と黒猫が適当に人物紹介していても良い。*/

/*猫たち移動*/

編集者：/*電話*/それで、勉強の調子はどう。

．．．．．。

はかどってる。

．．．。

年末はどうするの。

帰れない？

あらそう、大変なのね、受験生は。

ああ、お母さんは心配ないわよ。

ちょうどいい忙しさね。

毎日、が寂しくない程度に忙しい。

そんな感じかな。

．．．。

ところで、紀幸、お兄ちゃんは？

え、そうなの。

困ったものね、宏幸にも。

駄目よ、そんなこと言っちゃ

何事にも、一生懸命取り組むのは、悪いことではないわ。

あなたも、頑張ってるね。/*電話を切る*/

◆『受験生・おたく』2日・火曜日

————— /*おたくの部屋*/

/*白猫で遊んでいる おたく*/

白猫：（遊ばれている白猫）にゅん、にゅん。

黒猫：いつまでやってるの、シロちゃん。

白猫：もうすこし——。ってか、来たばっかだよー。

黒猫：このうちはあんまりいい餌くれないよ。

 スナック菓子ばかりもらっていると体に悪いよ。

白猫：でも、遊んでくれるよー。

黒猫：ただで遊ばれてちゃ駄目だって。（主張する黒猫）

餌をもらうかわりに、可愛がられてやる。これは、対等の契約なんだから。

白猫：わかったー。じゃあ、また、夜来よう。この兄ちゃん、夜まで起きてるし。

黒猫：でも、騒いでると、体の大きいやつに追い出されるぞ。

/*個別劇団の公演時、受験生を演じていた役者が巨漢だった。*/

/*牛乳パックをもった受験生*/

受験生：ただいま。

黒猫：ほら、帰ってきた。

白猫：ミルクくれー。ミルクー――。

受験生：にいちゃん、また、猫連れ込んでー。

今はいいけど、僕が勉強してるときはやめてよ。

黒猫：人間は夜中に勉強しちゃ駄目なんだよ。夜中は猫の時間なんだから。

おたく：ところで、どこに行ってたんだ？

受験生：推薦の願書を出してきた。

おたく：なんで、そんなことを。おまえ、推薦で大学入るつもりなのか？

受験生：え、なんか、まずいことあるの。

おたく：おまえ、毎日夜遅くまで勉強してるだろ。

受験生：そんなに、してないよ。

おたく：いや、してるな。猛勉強してる。

受験生：なんで、そんなこと言えるのさ。

おたく：だって、俺は毎日、夜遅くまでチャットしてるもん。

受験生：げっ。

おたく：ともかく、その推薦が取れると勉強は必要なくなるだろ？

受験生：うん、そうなるね。

おたく：そうすると、これまでおまえがしてきた勉強が無駄になるだろ。

受験生：無駄、かなあ。

おたく：兄ちゃんは、無駄なことは嫌いだな。

受験生：別にいいんだよ。僕は勉強嫌いじゃないし。

おたく：だったら、なおさら、だ。

勉強するのにちゃんとした口実があったほうがいいだろ。

受験生：そうだね。

おたく：その推薦は落ちるように祈っておいた方がいいな。

受験生：そ、そうかな。

おたく：うん、間違いないな。

受験生：にいちゃん。

おたく：なんだ。

受験生：にいちゃん、さっき、無駄なことは嫌いだ、って言ったよね。

おたく：ああ。

受験生：にいちゃんって、無駄なことしかしてないように見えるんだけど。

◆『ハト・竜太郎』3日・水曜日

/* 教会の庭 */

/*戯れているハトとイヌ（竜太郎）*/

ハト：ぼっぼっ。

竜太郎：ぱびぷぺ。

ハト：ぼっ。

竜太郎：ぱびぷぺ。

ハト：ぼっ。

/*傍から見ている白猫黒猫*/

黒猫：あいつら、何がしたいんだ。

白猫：警察犬になりそこねた犬と伝書鳩になりそこねたハトが傷をなめあってるんだよ。うんうん。

黒猫：就職難だからねえ。って、関係あるの？

白猫：クロちゃん、そんなこと私に聞かれても・・・。

◆『受験生にボタンを渡す。』4日・木曜日

/* 道 */

/*神父は謎の男に変装している*/

謎の男：あなたは幸せですか？

/* 受験生、無視して、振り払うように電話を始める。*/

謎の男：幸せですか？

受験生：ああ、母さん。

謎の男：/*ぶつぶつ*/（岩崎）則幸さん。あなたは、幸せですか。

受験生：・・・・・・・・。

うん、とりあえず、国公立で、

あんまり、お金のことで迷惑かけられないしさ。

え、兄ちゃん？

また、なんか、作ってたみたいだけど。

僕は興味ないから。

えっ、ああ、うん、わかった。

仲良くやってるよ。

お互い干渉しないから。

じゃあ、また。（電話を切る）

謎の男：（終わったのを見計らって）あなたは、幸せですか。

受験生：何なんですか、さっきから。邪魔しないでください。

謎の男：幸せですか。

受験生：（きっぱりと）失礼します。忙しいので。

謎の男：則幸さん。（逃げてはいけませんよ。と引き止める）

受験生：えっ。

謎の男：あなたにはこの幸せのボタンを与えましょう。

（催眠術にかけるような感じで）そして、今日から、毎日持って歩き、
なにか、いいことがあったら、押してください。

/*謎の男、謎のボタンを渡す。*/

/*受験生、ふらふらとうっかりそれを受け取る*/

謎の男：今なら、おまけで携帯ストラップも付きますよ。

◆『告白のしかた』5日・金曜日

_____ /* 作家の部屋 */

作家：今日中に、プロットを書き上げて、

明日は、幸子さんに告白したい。

ああ、どうやったら、いいのだろう。

.....

/* それを聞いている白猫。ほかの事をしていた黒猫 */

白猫：ねえ、クロちゃん。告白、ってどういう風にやるか知ってる。

黒猫：告白って、何の告白だよ。

白猫：何でもいいよ。告白だよ。

黒猫：（ちょっと気だるげに）だったら、隣の教会に行って来いよ。

今の時間だったら、たぶん覗けると思うぜ、告白。

_____ /* 教会の告解室 */

受験生：神父様、僕は罪を犯しました。

神父：では、その罪を神の前に告白しなさい。

受験生：.....今日もまた、.....

/*ためた後*/兄を動かなくなるまで殴ってしまったんです。

神父：それは、なぜですか。

受験生：なにしろ、うちのにいちやんときたら、オタクで、引きこもりで、
プラモデルとか、フィギュアとか、パソコンとか。

神父：/*なぜかいきなり怒る*/だまりなさい！！！！

どうやら、あなたは大変罪深いようですね。

ひとの趣味には寛容でなくてはいけませんよ。

趣味の世界は奥が深いのです。.....ふう。/*落ち着く*/受験生：す、すみません。

神父：十分に反省し、主の祈りを2回唱えなさい。

/*唱えるように*/

全能の神、あわれみ深い父は、

御子キリストの死と復活によって世をご自分に立ち帰らせ、

罪のゆるしのために聖霊を注がれました。

神が教会の奉仕の務めを過して

あなたにゆるしと平和を与えてくださいますように。

わたしは、父と子と聖霊のみ名によってあなたの罪をゆるします。

/*途中でフェードアウト*/

_____/ * 教会のすぐ横 */

白猫：そうか、あれが、告白。

竜太郎：わん！

白猫：わあああ。なんだ、竜太郎か。

竜太郎：なんだ、竜太郎か。とはなんだ。覗き見はいけないことだぞ。

元警察犬だった、じっちゃんの名に懸けて 逮捕だーーーー。

白猫：の、覗き見なんてしてないもん。

えーーーーん、えーーーーん。

竜太郎：/*泣かれて戸惑う*/おい、おい、おい。こ、困ったなあ。

神父：おやおやおや、どうした。どうした。

うちの、竜太郎が脅かしたりしたのかな。

/*竜太郎 神父が出てきてさらに困ってしまう。*/

白猫：びえーーーーん。びえーーーーん。

/* ひょっこりと現れるハト */

ハト：どうしたの、さかっているの？

白猫：/*激しく*/びえーーーーん。びえーーーーん。

神父：よしよし、子猫ちゃん。うちの竜太郎は、

悪いことしてない仔には噛み付いたりしないよ。

竜太郎：し、神父様一、こいつ、告解室覗き見してたんだよ。

充分、悪いことだよ。

白猫：びえーーーーん。びえーーーーん。

神父：そうだ、子猫ちゃんにもこれをあげよう。

白猫：（びたっと泣きやむ）なに、これ、食べられるかな？

/*食べようとしてみたり、開けようとしてみたりする。*/

ハト：タベモノ？タベモノー、タベモノー。

神父：これこれ、それは、食べられないよ。

それは、幸せのボタン、何かいいことがあったら、

そのときに、このボタンを押すんだよ。いいね。

白猫： はい。でも、食べられないんでしょう？/*残念そう。*/

神父： 今なら、おまけで笹かまぼこをつけますよ。

白猫： わーいわーい。

神父： じゃ、気を付けてお帰り。

それから、竜太郎。お前にもスイッチを渡しておこう。

なにか、いいことがあったら、忘れずにこのボタンを押しなさい。

竜太郎： 神父様、笹かまぼこは？

/*神父様 笹かまぼこはあげずに帰る。*/

_____/*作家の部屋*/

作家：。

締め切りは日曜日。幸子さんが来るのも日曜日。

日曜日が待ち遠しいけど、日曜日が来て欲しくない。

幸子さんに会いたいけれど、会いたくない。

.。

白猫： ごしゅじんさまー。

作家： 会いたいけど、会いたくない。。

白猫： ご主人様ー、告白の方法がわかったよ。

まず、「神父様、私は罪を犯しました。」って、言うんだ。

作家： そうか、それだ。これは、いいアイデアだ。（タイピングを始める作家）

◆ 『「ミステリー姑殺し」・前編』 6日・土曜日

_____/*作家の部屋*/

/*執筆中の作家*/

_____/*小説内の世界に入る 神父の回想シーン*/

奥さん（幸子）： 神父様、私は義母を、姑を殺しました。

神父： なんですって。

奥さん（幸子）： お義母さんの、お食事に毒を入れていたのは私なんです。

神父： なんと。

奥さん（幸子）： 神父様、私はどうしたら言いのでしょうか。

神父：。

奥さん（幸子）： 神父様。

神父： （落ち着けながら）今は、未だなんとも言えません。

3日後、私の方から答えを持って貴方の家に参ります。

そのあいだ、まってください。

_____/*すばやく転換 小説の中の教会*/刑事（竜太郎）： なるほど。

こまった事件ですね。

神父： どうしますか。

刑事（竜太郎）： 警察としては、自白だけで逮捕したりはできません。

神父： 私としても、職業上知りえた秘密をおおっぴらにするのははばかられます。

刑事： 慎重に、近所の聞き込みをしますか。

_____/*すばやく転換 聞き込み風景*/

近所の人（ハト）： /*うわさ好きのおばさん風*/え、なに、あのうち。

ああ、ああ、確かにしょっちゅうケンカしてたわよ。

もう、なんか、えらい剣幕でさあ。

刑事（竜太郎）： なるほど、なるほど。

_____/*すばやく転換 小説の中の教会*/

神父： しょっちゅうケンカしていた、っと。

刑事（竜太郎）： しかし、嫁と姑の仲が悪いなんてありふれた話じゃないですか。

動機としては弱い気がしますねえ。証人

神父： そうですねえ。

刑事（竜太郎）： いずれにしても、状況証拠だけでは弱いですねえ。

入れた毒が特定されるとよいのですが、

神父： たしか、あの時、「お義母さんの、お食事に毒を入れていた」

と、そうっていました。

刑事（竜太郎）： 「毒を入れた」ではなく、「毒を入れていた」と言ったんですね。

神父： おそらく、ごく少量ずつ、水銀か砒素のようなものを

混ぜていたのではないのでしょうか。

刑事（竜太郎）： そういえば・・・・・・・・。

_____/*すばやく転換 聞き込み風景*/

近所の人（ハト）： ひどい、嫁よねえ。おばあさん、最近目は足が弱っていたというのに。

_____/*すばやく転換 小説の中の教会*/

神父： /*少し何かひかったように*/足と、目が弱っていた？

刑事： ええ、毒を盛られていた可能性が高いですな。

神父： そうですね。

刑事： なにか、疑問が？

神父： いえ、たいしたことではありません。遺骨を調べればわかるんじゃないですか。

水銀か、砒素。どちらも、骨に残りやすい毒です。

刑事： それが、無理なんですよ。あの時、確か・・・・・・・・。

_____/*すばやく転換 聞き込み風景*/

刑事： おばあさんの方が最近亡くなれたと聞きましたが、

何か、変わった話とか聞いてませんか。

近所の人（ハト）： そうそう、骨は霞ヶ浦に散骨したって聞いたわよ。

何も、あんな汚いところに撒いてもらわなくってもいいのにねえ。

_____/ *すばやく転換 小説の中の教会* /

神父：散骨ですか、それはこまりましたねえ。

刑事：証拠隠滅を図った可能性が高いですな。

神父： / *少し考えた後* / 明日になれば全てが明らかになると思います。

まずは、動機について聞いてみましょう。

◆ 『すれ違いのプロポーズ』 7日・日曜日

_____/ *作家の部屋* /

編集者：それで、これが、来年から始まる新シリーズのあらすじですか。

作家：そうです。すべて「神父への罪の告白」から始まって、

知り合いの刑事が奔走し、神父がゆったりと謎を解くというシリーズです。

編集者：そうですか、面白そうですね。

それにしても、この前までは全然すすんでなかったのに、

さすが、先生、やる時はやるって感じです。

作家：きょ、恐縮です。

_____/ *小説の世界に入る* /

神父：奥さん、お姑さんとケンカしていた理由を教えてくださいませんか。

奥さん（幸子）：神父様には、話しづらいので……。

神父：それと、骨は散骨したと聞きましたが、

奥さん（幸子）：はい、それが義母の遺言でしたから。

一応、先祖代々の墓もあるにはあったのですが。

神父：なるほど、全てがわかりました。

奥さん、神は貴方の罪をお許しになるでしょう。

そして、お姑さんも貴方を許しているはずです。

ただ、あなたも彼女を許し、感謝の気持ちを忘れないようにしてください。

奥さん（幸子）：はい。

神父：では、刑事さん。帰りましょう。

刑事：ちょっと、ちょっと、神父さん。いいんですか。

神父：ええ、すべては解決したんです。神の御心によって。

_____/ *作家と編集者 * /

編集者：どう、解決したんですか。この後、どうなるんですか。

作家：それは、次回までのお楽しみ、ですね。

編集者：そうですか、では、楽しみにしてます。

作家：さ、幸子さん。

編集者：どうしたんですか、あらたまって。

作家：き、君の作った味噌汁が飲みたい……です。

黒猫：ご、ご主人様あ、今時、そんなプロポーズする人いませんよ。

編集者：ええ、いいですよ。

黒猫：ええっ？！

作家：ほ、ほんとですか。

編集者：そのくらいなら経費で落とせますから。

どこかに飲みに行きますか。それとも、出前にしますか。

作家：いや、そうじゃなくて、君の作ったやつが飲みたいです。

編集者：うーん、インスタントじゃ駄目ですよねぇ。

作家：できれば、手作りの方が……。

編集者：それじゃあ、今週の水曜日でよければお味噌汁、作って差し上げますわ。

それで、よろしいですか。

作家：え、それで、よろしいような。なんか、違うような……。

編集者：それまでに、解決編は書き上げておいてくださいね。

作家：は、はい。

編集者：楽しみにしてます。お味噌汁、赤味噌？白味噌？

それとも合わせ味噌、麦味噌、田舎味噌。それと、具は？

作家：お、お任せします。

編集者：はい。では次の金曜日に。/*立ち去る編集者*/

作家：な、なんか違わないか。

黒猫：ご主人さまぁ。明らかに違いますよお。

◆『黒猫・ハト・竜太郎』8日・月曜日

/* 道 */

黒猫：あ、ハトだ。えい。（とびかかる）

ハト：きゃっ、何すんのよ。（うまくよける）

黒猫：ちっ、逃げられたか。もう一度、えいっ。（とびかかる）

竜太郎：そこまでだ。

黒猫：邪魔する気。

竜太郎：余計な殺生はしてはいけない。

黒猫：いいもん、ちゃんと食べるんだもん。余計な殺生じゃないもん。

ハト：た、食べられると困りますう。

竜太郎：大丈夫だ。うちのじいちゃんはシェパードで警察犬をしてたんだ。

だから、僕にも正義の心が燃えているんだ。

じっちゃんの名に懸けて、困っているものをほおってはおかない。

黒猫：父親は、チャウチャウのくせに。

竜太郎：（吠えかけて泣きに転じる）がるるうるるうるる。それは言っちゃ駄目だよ。

ハト：ちゃうちゃうー。ちゃうちゃうー。

黒猫：あ、そうだ。竜太郎さん。実は私も困っているんです。

竜太郎：なに、そうか。私は困った人の味方だ。話してみなさい。

黒猫：じつは、迷子になっちゃったんですう。

えーん、えーん。

竜太郎：そうか、それは大変だ。

おうちは？

黒猫：わかんない。えーんえーん。

竜太郎：そうか、教会のお隣か。

名前は？

黒猫：わかんない。えーんえーん。

竜太郎：そうかー、クロちゃんか。

黒猫：ちっ。普通は

困ってしまって、わんわんわわん。だろ。

◆『おたくにボタンを渡す』9日・火曜日

/* 道 */

（おたく、たくさんの薄い本を抱えて登場）

おたく：ふーふー。お？うわとっとおっと！

（本をばさばさと落とす。全てビニールのカバーがかかった同人誌）

あちゃー。（拾い集めながら）ノリユキに見つかる前になんとかしないと・・・。

謎の男：こっちにも落ちてますよ。はい。

おたく：あ、ありがとうございます。

/* しばらく二人でもくもくと本を拾い集める */

謎の男：それにしても、なかなかのラインナップですなあ。

ほらこれなんて、あのサークルのやつですね。あんまり見ないやつですけど。

おたく：1995年の初参加時のやつですよ。今は壁際の一等地に構える彼等ですけど、
当時はこんなもんを描いてたんです。

謎の男：ほほ一。確かにまだまだ拙いすなあ。

それで、これが……。2003年のやつですね。ほほ一、このサークルも知ってる。

おたく：2003年のやつですけど、第3版のやつです。

表紙は一緒なんですけど、ほら、ここを見て下さい。

謎の男：お、違いますね。

おたく：そうです。子供が産まれたとかで、あとがきが4ページ追加されています。

差し替えではなく追加という部分が珍しい作品ですよ。

ちなみにこれが初版で、これが2版・・・・・・・・

(怪訝そうに)・・・なんで、「違う」と解ったんですか・・・。

謎の男：初版は持ってますから・・・

おたく・謎の男：(堅い握手)

謎の男：ところで、なんでこれだけを持ち歩いているんですか？

おたく：聞いて下さいよ。ノリユキ・・・えっと、弟なんですけど、
ノリユキがですね、この作品を捨てようとするんですよ。

謎の男：それはいけませんね。それは弟さんが悪い。

おたく：そうなんです。僕の部屋はすでにコレクションでいっぱいなんです、
ちょっとノリユキの本棚を借りただけなのに・・・

謎の男：はあ。

おたく：まったく、ノリユキときたらこの作品の価値が解らない唐変木で、
捨ててやるなんて言い出す始末。それで必死になって逃げている最中なんです。
日頃から兄には従えと言っているのに・・・まったく・・・。

謎の男：はあ、まあ、なんていうか、お兄さんでしょう？

おたく：それがですねえ、あいつは体ばかりが大きくて、
まだまだガキでガキで・・・

◆『「ミステリー姑殺し」・解決編』10日・水曜日

/*小説の中の教会*/

刑事：神父さん、あれだけで何がわかるって言うんですか。

神父：私にはわかったよ。すべてがね。

刑事：じゃあ、早速逮捕しましょう。

神父：まあ、待ちなさい。コーヒーでも飲んで落ち着いてください。

刑事：しかし。

神父： いいから、私の話を聞いてください。

刑事： はい。

神父： まず、彼女が入れた毒についてです。

刑事： 水銀ですか、砒素ですか？

神父： その毒なんですけど・・・、
あなたの飲んであるコーヒーに入っています。

刑事： うっ、ごっほごっほ。神父さん、冗談はやめてください。

神父： いえ、冗談ではないんです。毒というのは、これです。

/*神父、刑事にピンを渡す。*/

刑事： （恐る恐る舐めてみて）砂糖？

神父： そう、砂糖です。

刑事： 砂糖は毒とは言わないでしょう。

神父： 普通はね。しかし、そのおばあさんは糖尿病だったのです。

刑事： 糖尿病。

神父： そう、目や足を悪くしていたのは、糖尿病の合併症によるものです。

刑事： なるほど、少しずつ食事の中の砂糖を増やし、
糖尿病を悪化させて殺した、そういうことですね。

神父： いえ、おそらく、そうではないでしょう。

刑事： 他に、理由があると。

神父： そう、彼女が砂糖を入れていた理由。

それは、・・・お姑さんが甘い物好きだったからです。

刑事： な、なんと。

神父： 彼女は本当は随分ためらいながら、砂糖を使っていたんだと思います。

その罪悪感が、「殺してしまった」という言葉になったんでしょう。

刑事： しかし、二人は仲が悪かったんでしょう。

神父： 私もそのことが気になっていました。

そこで、今日、それを聞いてみました。

刑事： でも、それについては何も話してくれなかったんでしょう。

神父： しかし、殺人まで告白した人間が「私には話しづらい」と言うような事。

それは、ひとつしかありません。

刑事： なんですか。

神父： おそらく、宗教についてです。お姑さんは仏教徒だったのでしょうか。

先祖代々の墓、って言ってましたしね。

刑事： なるほど。

神父： しかし、最終的に二人は仲直りしたんだと思います。

刑事： なぜ、そんなことが言えるんですか。

神父：散骨です。

この埋葬法はキリスト教とも、仏教とも関係しません。
お姑さんとお嫁さんが折れあって決めた方法でしょう。
それと、本当の死因についてですが・・・・・、
彼女が出していた食事だけが原因とは言えないようです。

刑事：なんですか。

神父：お姑さんの部屋には、ひっそりとですが、仏壇がありました。

刑事：あ、お供え！

神父：こっそり、食べていたんでしょうねえ。

—————/*作家の部屋*/

作家：これが、解決編になります。

編集者：いい、話ですね。

黒猫：そおかあ？

編集者：ただ、まだつくりが甘いところが多々見受けられます。

もう少し、資料調べをした方がいいですね。

せっかく、すぐ近くに教会があるんですから、

そのくらいは調べた方がいいですよ。面倒くさがらずに。

白猫：あいかかわらず、厳しいね。幸子さん。

黒猫：いや、彼女が言っていることは正しいよ。

編集者：はい、お味噌汁。

作家：ふう、いいお味だ。でも、ちょっと辛すぎるような。

編集者：私、前の夫。高血圧で亡くしてるんですよ。

作家：（乾いた笑い）

◆『次の日・煮干しを食べる二匹』 11日・木曜日

—————/*作家の部屋*/

白猫：クロちゃん、クロちゃん、この煮干し、凄く美味しいよ。

黒猫：その、煮干しって、

昨日幸子さんが味噌汁の出汁をとるのに使った出涸らしだろ。

白猫：でも、でも。美味しいよ——。うるうる。

黒猫：わかったよ。食べればいいんだろ。

ぱくっ。こっこっこれは！長崎県五島列島産の最高級品。

出汁をとった後でも、これほどの味わいがあるとは！

白猫：ご主人様が幸子さんと結婚したら、毎日これ食べられるかなあ。

黒猫：そ、そうだな。

白猫：そうだったら。

黒猫：し、幸せだあ。

おい、あのボタン押した方がいいんじゃないか。

白猫：神父様から貰った奴？

黒猫：そ、それぞれ。

白猫：よーし、ぽちっとな。

黒猫：そしたら、急いで離れる。

白猫：爆発、しないね。

黒猫：絶対、爆弾だとおもったのにな。

◆『謎の男、ボタンを配る。幸子編』 12日・金曜日

_____/ * 道 */

謎の男：あなたは幸せですか？

編集者：・・・・・・・・。

謎の男：岩崎幸子さん。

編集者：（名前を呼ばれたので驚く）？なんですか……。

謎の男：ご心配なく、怪しいものではありません。

編集者：見るからに怪しいですが。

謎の男：気にしなくていいですよ。

編集者：そういわれると、ますます、怪しいのですが。

謎の男：あなたは幸せですか？

編集者：（はっとして、少し考えて）うーん、微妙です。

謎の男：・・・・・・・・。

編集者：別に不幸ってわけじゃないけれど、

とりたてて幸せってことも無い気がします。

謎の男：なるほど、そんなあなたにも必要なものは、これです。

編集者：なんですか。これ？

謎の男：これは、幸せのボタンです。

編集者：何かのキャッチセールスですか。

謎の男：いえいえ、お金なんていりません。ただで、さしあげます。

あなたは、自分が幸せだと感じたときにこのボタンを押す。

それだけなんです。

編集者：幸せを感じたときに、ボタンを押す。

謎の男：しっかりと、お願いしますよ。

◆『白猫・神父』 13日・土曜日

_____/ * 教会 告解室 */

白猫：神父さん、お話があって来たの。

神父：では、神の前にあなたの罪を告白してください。

白猫： 罪って何？

神父： あなたが嘘をついたり他人を騙したりしたことについて、
この場で打ち明けてください。

白猫： うーん、そうかあ。よーし、神父さんはいい人だから教えてあげる。

私はね、本当は人間とおしゃべりできるんだけど、
普段はしゃべれないふりしてにやんにやんって言ってるの。

これは、絶対がないしょね。

神父： はい？

白猫： それから、この前雨どいの上からこの部屋を覗いていて竜太郎に怒られたの。

神父： わかりました。父と子と聖霊の御名においてあなたの罪を許しましょう。

これからは純真な大人をからかってははいけませんよ。

/*白猫は出て行く。神父はその後姿を見る。*/

白猫： にゃーん。

神父： ！？

◆『おたく、ボタンについて語る』 14日・日曜日

_____/*受験生の部屋 あるいは おたくの部屋*/

受験生： 兄ちゃん、このボタン、なんだかわかる？

おたく： ああ、俺はわかったよ。

受験生： え、ほんと？

おたく： 外側の部品は、コマチ模型だな。内側の基盤は宮田電子のボードが使われ、
制御用にはカワダイ製の素子が組み込まれている。

電力は9Vのラジコン用アルカリ電池、それから信号回路。

基盤に組み込まれたコンデンサーの量からしてリモコンか、発信機の一つと
見るべきだろう。盗聴用のマイクは残念ながら付けられていなかった。

総制作費は大体、一万三千五百円。

くだらない装置の割りに随分とお金をかけているな。

外装やハンダの具合から見て

受験生： そういうことじゃなくて、

誰が、何のためにこんなものを配っているか、ってことだよ。

おたく： なんで、そんな無駄なことを？

受験生： 無駄かなあ。ところで、兄ちゃん、もう押してみた？

おたく： だれが！ なんでそんな無駄なことを！

というか、押す前に分解しちゃったからな。

受験生：

◆『作家・神父』15日・月曜日

/* 道 */

謎の男：こんにちは。海田幸一郎さんですね。

作家：な、なんの御用ですか。

謎の男：（なれなれしく）いやあ、苦劳しましたよ。

貴方は部屋にこもりっきりでめったに外に出てこないから。

きょうは、どうして、こんなところに、

作家：ちょっと、となりの教会に行くだけですよ。

謎の男：（突然あわてて）あ、そうか。 しまった。

作家：どうか、しましたか？

謎の男：（早口で）えっと、あなたにはこの「幸せのボタン」をさしあげます。

ご使用にあたっては添え付けの説明書をよく読み、用法・容量を守って

正しくおつかいください。

では、また、お会いしましょう。サラバだは一っはっはっはっは——。

/* 笑いながら慌てて去っていく謎の男 */

作家：なんなんだ？

/*教会へ*/

/*恐る恐る教会に入ってくる作家*/

作家：すみません……。留守かな……。

すみませーん……。誰か居ませんかー？

/*作家、そのあたりの、扉をあけてみる*/

作家：うわっ、なんじゃ、こりゃ。

神父：そ、そこは私のコレクション置き場です。

作家：あ、し、し、神父さん。も、申し訳ない です。

神父：今日は、どのような用件でいらしたのですか。

作家：えっつと、懺悔室はどちらですか。

神父：懺悔室？ああ、告解室（こくかいしつ 或いは こっかいしつ）ですね。

ご案内いたします。/*作家を案内していく 神父*/

作家：（言葉の意味がわからなかったので聞き返す）告解室？

神父：告解を行う小部屋のことですよ。

仏教の懺悔と、カトリックの告解とは微妙に違います。

作家：そ、そ、そうですか。勉強不足ですみません

神父：あなたは、こちら側にどうぞ。

/*告解室*/

作家：え———と、

わたしは……。私は、嘘を吐きました。

神父：（優しく、ゆっくりと）なるほど、その嘘の内容を当ててみせましょうか。

作家：えっ？

神父：あなたは、ここに新しく書き始めたミステリー小説のアイデアを探しに来た。

だから、さっき、「私は罪を犯しました。」と言ってしまったのに

自分の罪を用意していなかったことに気づき、その結果として

「私は嘘を吐きました。」という事になった。　そういうことですね？

作家：な、なぜそこまで。

神父：私もプロですから。

作家：すいません。まったく、その通りです。

神父：構いませんよ。私も、実際の告解の様子を見せてあげるわけにはいきませんが、

それがどのようなものかをお話することはできます。

では、まず「ゆるしの秘跡」について簡単にお話しましょう。

作家：ゆるしの秘跡？

神父：告解というのは、「ゆるしの秘跡」の考えに基づいています。

罪を犯した人間を罰したり、反省させることが目的ではなく、

神や教会との仲直りを図るのが目的なのです。

教会憲章の11には、

告解の秘跡を受ける者は、神の慈悲によって神に加えた侮辱のゆるしを受け、

/*途中からフェードアウト*/

同時に、自分たちの罪をもって傷つけた教会、

愛と模範と祈りによって自分たちの回心のために努力している教会と和解する。

とあります。・・・・・・・・・・

_____/*教会のすぐ外　すばやく転換*/

ハト：私には難しいことはわかんないわ。

竜太郎：ねえ。ハトさん、ハトさん。ハトさんにはどうして名前が付いてないんだ？

他の動物たちにはクロとか、シロとか、竜太郎とか、みんな名前があるのに。

ハト：名前が付いてもすぐ忘れちゃうからよ。

・・・・・・・・・・。で、なんの話だっけ。

_____/*教会までの道*/

/*　服が落ちている。　*/

作家：これは・・・さっきの男の衣装じゃないか。

なんで、こんなところに・・・・・・・・・・。

/*竜太郎が急いでその衣装をひったくって回収*/

_____/*教会内部*/

神父：神様、今日わたくしは随分多くの嘘をついてしまいました。

罪深いわたくしをおゆるしくください。・・・・・・・・・・。

◆『プロポーズ』16日・火曜日

————— /*作家の部屋*/

作家：幸子さん、結婚してくれないか！

編集者：え、で、で、でもでも。

わ、私はバツイチだし。

作家：それでも構わない。私は、普段から何かを考え込んでいるような

そんな人生経験を積んだ君の姿に惹かれたんだ。

編集者：わ、わたしは、子持ちだし。

作家：そのことも、含めて、君のことが好きなんだ。

編集者：そうですか。/*編集者、ボタンを取り出す。*/

作家：そのボタンは？もしかして。

編集者：もらったんです、このボタン。

なにか、いいことがあったときに押してくださいって。

作家：私も持っているんだ。同じものを。

今日、君からいい返事が聞けた時の為に持ってきた。

編集者：そうですか。

作家：それで、返事は・・・・・・・・。

◆『竜太郎とハト』17日・水曜日

————— /* 教会の庭 */

竜太郎：ハトさん、結婚してくれないか！

ハト：え、で、で、でもでも。わ、私はハトだし。

竜太郎：それでも構わない。俺は、普段から何も考えていない

君の、平和そのものというような姿に惹かれたんだ。

ハト：そ、そりゃあ、私は平和の象徴だし・・・。

竜太郎：そのことも、含めて、君のことが好きなんだ。

/*横で見ていた猫たち*/

黒猫：まったく、何がしたいんだろう。

白猫：暇なんだよ。

◆『「ミステリー轢き逃げ」・前編』 18日・木曜日

_____/ * 作家の部屋 */

編集者：次回作、出来ました？

作家：なんとか、前半だけ。

編集者：じゃあ、早速 打ち直しましょう。時間もないですから。

_____/ * 小説内のシーン（教会）*/

神父：今日は、あなたの方から告白したいことがと。

刑事：ええ、神父さん、実は俺、結婚することになったんです。

神父：（あまり驚かず、一呼吸置いて）そうですか。気をつけなさい。

刑事ドラマによると殉職する確率が一番高いのは結婚が間近になった時です。

刑事：そんな縁起の悪いこと言わないでくださいよ。

神父：とくに、誰かにこっそり告白したような時が危ない、

婚約指輪を見せたりなんかしたら100%死にます。

刑事：勘弁してくださいよー。

しかし、意外ですね。神父さん、そういうドラマ見るんですか。

神父：見ますよ。大好きですから。本で読む方が好きですけどね。

最近、個別出版から海田幸一郎が出している新シリーズなかなかいいですよ。

今、ちょうど、キャンペーン中で・・・・・・・・

_____/ * 作家と編集者に戻って */

編集者：これはあまりにも露骨じゃありません？

作家：そうですね。ははははは。（乾いた笑い）

編集者：削除しときますから。

_____/ * 小説内のシーン（教会）*/

刑事：いえ、とりあえず、わかりましたから。

神父：だからあなたも気をつけて、

くれぐれも先輩をかばって、やくざに撃たれたり、

逆上した犯人に刺されたりしないように。

刑事：大丈夫ですよ。この街は平和ですから。

神父：そうでしょうか。

つい最近、湊川商店街の交差点で轢き逃げがあったでしょう。

刑事：え、そんな話知りませんよ。

神父：そうですか。・・・・・・・・・・。

刑事：なんだか、釈然としない様子ですね。何か、あったんですか。

神父：いえ、別に。

刑事：何か、あったんですね。

神父：しかし、これは、そのう。

刑事：秘密厳守ですか。

神父：そういう制度ですから。

刑事：神父さん、「教会の制度や神の教えのまえに、現実の問題に対応していかなければならない。」あなたは、そういう方針のはずでしょう。

神父：しかしねえ。

刑事：他には口外しませんから。ほら神父さん、私へのご祝儀だと思って。彼女に、活躍している姿を見せたいんですよ。

_____/ * 小説内 神父の回想シーン 告解室*/

男（受験生）：神父様、私は人を轢いてしまいました。

神父：それで、あなたはどうしたのですか。

男（受験生）：怖くなって、そのまま、逃げてきてしまいました。

神父：なるほど、轢き逃げですね。

男（受験生）：はい……。でも、相手も悪かったんです。

彼女は、あの見通しの悪い交差点で、本を読んだまま、飛び出してきたんです。

神父：なるほど、それは問題ですね。場所はどこですか。

男（受験生）：……。湊川商店街の交差点です。

神父：あの場所は人通りの多い場所ですし、カーブミラーも設置されているはずですよ。その歩行者も問題ですが、あなたの不注意も大きいのでは？

男（受験生）：しかし、もう、夜中でしたし、私も、その、急いでいましたので。

神父：スピードを出していたんですな。

男（受験生）：は、はい。

神父：……。

男（受験生）：神父さん、私はどうしたいのでしょうか。

神父：教会は、あなたの罪を裁く場ではありません。

神との和解を仲立ちするのが教会なのです。

世間に罪を償うのはあなた自身の仕事です。

男（受験生）：……。

_____/ *小説内 教会で神父と刑事のシーン*/

刑事：それだけですか。他に、何か情報はありますか。

そのひき逃げ犯の年齢、氏名、住所、電話番号とかは？

神父：他には、何も聞いてなかったんですよ。

なにぶん、昨日、夜中にたたき起こされて、聞いた懺悔だったので……。

刑事：夜中にたたき起こされたんですか。

神父：ええ、結構居るんですよ。

夜中の方が罪の意識にさいなまれやすいですからね。

基本的に教会は24時間営業・年中無休ですから。

刑事：神父って休みはないんですか。日曜日は？

神父：日曜日は一番忙しい日ですよ。

でも他の日はいつでも、半分休みのようなものですから。

刑事： はあ。

神父： そんなときは読書をしています。この前まで、個別出版が出していた。

「刑事殉職」シリーズを読んでいたんですが……。

全部コレクションする前にキャンペーンが終わってしまって。

しかたがないから、あなたのような暇人と世間話をしたり。

刑事： 暇じゃないです。今だって実は勤務中です。

_____/ *小説内 教会で神父と刑事のシーン 後日* /

刑事： 統計オタクの同僚に確かめてもらったんですけどね。

神父さんが仰っていたような事故は起きていません。

湊川交差点では、10年前まで遡っても人身事故は起きてませんし

今月はこの近くで事故は起きていません。

これは断言できます。

神父： なるほど、やはりそうなのですか。

刑事： やはり？

神父： 刑事さん。貴方は、幽霊を信じますか？

刑事： お、おれは、まだ見たことがないのでなんとも。

神父： 私は信じてません。

しかし、この前あの男がもう一度現れて言ったんです……。

_____/ *小説内の神父の回想シーン（告解室）* /

男（受験生）： 神父さん、助けてください。

神父： あなたは……確か……。ひき逃げの？

男： あのときの少女の笑顔が目の前にちらついて離れないんです。

神父： 笑顔？

男： はい、彼女は轢かれる瞬間まで笑っていました。

それと、あの気味の悪い声が……。

神父： ちゃんと自首することですね。

男： しました。

神父： えっ？

男： 湊川交番に自首したんですが……。

そんな事故は起こっていない、と言われたんです。……。

_____/ *作家と編集者 * /

作家： 取り敢えず、ここまでですね。

編集者： これは、どういう風が続くんですか。

作家： 夜中に本を読みながら歩くことはできません。

編集者： そうですよ。まさか、ほんとうに幽霊なんて、反則技

作家： 彼が轢いたのは、出版社のキャンペーンで書店に置いてあった

立て看板だったんですよ。

編集者：それが、横断歩道に放り出してあったんですか。

作家：いえ、不埒な人間が盗み出して運んでいたんです。

その人はうまく逃げたから轢かれずに済むのですが。看板の方はおじゃんです。

編集者：（訝しげに）その人はどうしてそんなものを盗んだんですか。

作家：コレクターだったんです。

世の中には変なものをコレクションする人がいるんですよ。

_____/ *教会* /

/*なぜか、一瞬 神父の居る場に照明*/

◆『バザーをする神父』 19日・金曜日

_____/ *教会の庭* /

/* 教会の庭先に様々な品物をならべて売っている人がいる。 */

おたく：こ、これは、あ、あのいわくつきのアイテムではありませんか。

神父：お、目が肥えていますね。

おたく：ぶっちゃけ。いくらですか？

神父：一万円でどうです。

おたく：これはネットオークションに出せば、5万はするもの。

それが、たったの一万円とは。

神父：ほほう。すばらしい鑑定眼ですね。

もちろん特別価格です。まあ、近所のよしみというやつですよ。

おたく：こ、こ、こ、こ、これ、買います。

神父：はい、はい。どうも。（先に品物を箱にしまつて渡す）

おたく：よっしゃあ、げつと——。（お金を払って去っていくおたく）

神父：（その背中に）できれば、幸せのボタンを忘れずに押してくださいよ。

/*作家登場*/

作家：こんにちは。神父様。こんな時期にバザーですか。

神父：ええ、今回、意外にお金がかかりまして。

倉庫からガラクタを引っ張り出してきて売っています。

作家：ああ、あのコレクションの？

神父：ええ、ほんの一部ですけどね。

作家：それで、景気はどうですか。

神父：良くないみたいですねえ。

作家：あまり、売れませんか。

神父：いや、よく売れてますよ。

作家：でも、さっき景気が良くないとおっしゃったでしょう。

神父：世の中、景気が悪いと、こういう場所で物が売れる。そういうもんです。

作家：なるほど。

神父：物事には必ず表と裏があります。

全てのことは何らかの形でつながっているのです。

作家：世の中が平和だからこそ、ミステリーを読む人がいる。

それと、似ていますかね。

神父：そうですね。

作家：（改まって）神父様、実は、相談したいことが。

神父：わかりました。中で伺いましょう。

/*二人は教会の中に入っていく*/

◆『気持ち鍋・お米が送られてきた日』20日・土曜日

/*おたくの部屋 あるいは 受験生の部屋*/

受験生：兄ちゃん、ただいま。

おたく：ん、おかえり。

受験生：お腹すいたあ。

おたく：ん、ああ、そうだな。

受験生：この部屋、寒いね。兄ちゃん、今日は鍋にしようか。

おたく：鍋かー、今日、作れる鍋は・・・気持ち鍋だけだな。

受験生：やったー、キムチなべー。体があたたまるねえー。

おたく：いや、「きもち鍋」だ。

受験生：きもち鍋？

おたく：鍋にお湯を沸かし、それに箸をつっこみながら、

鍋を食べた気になるという、気持ち鍋だ。気持ちが温まるぞー。

受験生：温まらないよ。逆に冷え込むって・・・。食材の買出しだったの昨日だろ。

おたく：実は、昨日、予定外に、お金をつかってしまって・・・

受験生：にいちゃん！だから、僕はいつもいつもいってるだ・・・。

/*そこにちょうど「どさっ」という音*/

おたく：何の音だ？おい、玄関の外、見てきてくれ。

/*しかたなく受験生、外を見に行く 箱を抱えて戻ってくる*/

受験生：兄ちゃん、母さんから荷物が届いたよ。

おたく：おう、あけてみな。

受験生：あ、お米だあ。嗚呼、ありがたや、銀舍利じゃ、シラハギ様じゃあ。

おたく：なんだ、米か。

受験生：兄ちゃん、何を言ってるんですか。魚沼産コシヒカリですよ。

ご飯をおかずにご飯が食べられるくらいのお米ですよ。

おたく：母さん、食材にはえらくこだわる人だったからな。

鹿児島産クロ豚、韓国産キムチ？

受験生：ありがたや、ありがたや、さっそくボタンを押さなければ。

おたく：何か、変だな。

受験生：何が。

おたく：宅急便なら普通、印鑑とかサインとか受け取っていくもんだろ。

荷物だけ置いて帰っちゃうなんて変だ。

————— /*簡単な転換 道*/

白猫：♪黒猫ヤマトの宅急便♪

黒猫：（ノッてしまうクロ）一步前へ——。

って、何がやりたいの？シロちゃん。

◆『結婚式』21日・日曜日

————— /*教会内部*/

神父：汝、海田幸一郎は、岩崎幸子を妻とし、

健やかなるときも、病めるときも、

歓びのときも、哀しみのときも、

富めるときも、貧しきときも、

妻とともに暮らし、慰め、助け、

命ある限り愛し続けることを誓いますか？

作家：誓います。

/* 次の台詞からは途中でフェードアウトして次の場面へ跳ぶ*/

神父：では、汝、岩崎幸子は、海田幸一郎を夫とし

健やかなるときも、病めるときも、

歓びのときも、哀しみのときも、

富めるときも、貧しきときも、

彼とともに暮らし、慰め、助け、

死が二人を別つまで愛し続けることを誓いますか？

編集者：誓います。

————— /* 教会の外 */

受験生：お、兄ちゃん、結婚式だよ。

おたく：随分と地味な、結婚式だなあ。参列者居ないぞ。

受験生：じゃあ、僕たちが盛り上げてやろうよ。

おたく：盛り上げるって、どうやって。

受験生：ライスシャワーをするんだよ。

おたく：ライシャワー？

受験生：違うよ、ライスシャワー。ほら、新郎新婦にお米をまくんだよ。

おたく：ああ、鬼は——外、福は——内って。

受験生：うーん。ちょっと、違うよ。俺、急いで取ってくるよ。

昨日、母さんが送ってきたお米があるから。

/* 教会の中 */

神父：では、指輪の交換を。

作家、編集者：はい。

神父：それから、ボタンを交換してください。

作家：えっ。

編集者：もしかして、ボタンを配っていたのって、神父様だったんですか。

神父：（前の編集者の台詞を完全に打ち消すように入る）夫婦というものは
相手の幸せを自分の幸せとして生活していくものです。

いま、ここで、二人のボタンを交換し、そのことを確かめ合ってください。

/* 教会の外 */

/* 白猫が黒猫を引っ張りながら登場 */

白猫：クロちゃん、早く行かないともうそろそろ出てきちゃうよ。

黒猫：えー、俺はいいよー。（行くのを渋っているらしい黒猫）

白猫：なんでよー。きょうは、ご主人様たちの大切な日じゃなか。

黒猫：こんな、大切な日に黒猫が目の前を横切ったら縁起悪いだろ。

白猫：そ、そんなこと、気にしなくても大丈夫だってば。

受験生：ふうう。間に合ったかな。 あ、猫。

おたく：え、どこどこ。

受験生、白猫：お。出て来たぞ。

おたく：え、ねこねこ。

受験生：それは、あと。

みんな：おめでとー、おめでとー。

おたく：おめで、・・・か、母さん。

編集者：（作家に）紹介します。息子の宏幸と則幸です。

猫たち：えー。

◆『結婚式の次の日』22日 月曜日

/*教会の外*/

/* 鼻歌まじりに、ハトが撒かれたお米を集めて食べている。

（普通につついていても良いし、箒で集めて、お釜に入れていても良い。）

/* 神父がにこにこその様子を見ている。*/

/* そこに、編集者が登場。*/

編集者：あ、神父様。おはようございます。

神父：おはようございます。海田の奥さま。

編集者：（苦笑しながら）昨日はどうもありがとうございました。

神父：いえいえ、仕事ですから。

神父の仕事は説教台というステージに立つことではなく、

信者一人一人のライフステージに立ち会って、それを見守ることであり・・・

(長いので途中でフェードアウト)

/* ハト、幸せのボタンを持ってきて、そのボタンを押す。*/

編集者：あら、ハトさんまでがあのボタンを・・・。

神父：そう、あなた方の結婚を、ハトまでが喜んでいる。

いささか、即物的な喜び方であるが、

編集者：神父様、なぜ、このボタンのことを？

神父：わたしも持っているんですよ。幸せのボタン。

編集者：でも、私や幸一郎さんも持っているって、どうしてわかったんですか。

神父：べつに、不思議ではありません。

私たちはみんなどこかでつながっているんですから。

◆『初雪』23日・火曜日

/* 舞台には雪が降っている */

_____/*教会の庭*/

/*竜太郎は喜んで庭を駆け回り、ボタンを押す。*/

_____ /* 作家の部屋 */

黒猫：（窓から竜太郎の様子を眺めながら）竜太郎は元気だなあ。

/*黒猫は、コタツの中にもぐりこむ、そこにはすでに白猫が寝ている。

そこで、ボタンを押す。*/

/* 作家登場 あるいは、コタツで寝ていて目を覚ます */

作家：さちこさん、幸子さん、さちこさん。

編集者：どうしたんですか。

作家：見てください。幸子さん。

編集者：うわあ、雪だあ。

作家：明日はホワイトクリスマスですね。

/*受験生登場 おたくもどこやらから登場*/

受験生：推薦入試の結果が返ってきましたー。

編集者：それで、どうだったの。

受験生：無事落ちましたー。

作家：そうか、残念だったな。まあ、まだ、チャンスがあるし・・・

おたく：（突然）そうか、則幸、よかったな。

受験生：うん、にいちゃんの言うとおりであったよ。

作家：な、なんで？

◆『クリスマス・イヴ』24日・水曜日・夜

/*教会の外*/

作家：やはり、あのボタンを配っていたのは神父様だったんですね。

神父：ええ。

編集者：それで、このボタンはいったい。

神父：このボタンはこのクリスマスツリーに明かりを付けるスイッチなんです。

受験生：そうか、これかあ。

神父：私はみなさんにこのボタンを配りました。

幸せだと感じたときに押してください、と言って。

そして、全員がこのボタンを押すと・・・。

作家：イルミネーションが付く。というわけですか。

編集者：でもまだ、ついてないわねえ。

神父：まだ・・・押してない人がいるんですよ・・・。

編集者：私は押してるわよ。もう何十回も・・・、・・・だって。（照れる）

作家：あ、それ以上、言わなくていいから。・・・わかってるから。（二人で照れる）

白猫：ひゅーひゅー。

受験生：僕も、押したよ。

黒猫：俺たちも押したよな。

白猫：うん。

作家：じゃあ、押してないの、宏幸か？

白猫：宏幸って誰？

受験生：ぼくも、押してないのは兄ちゃんだと思う。

黒猫：あのおたくかよ。よし、俺、行ってこよう。

白猫：だ、だめだよ。他人のボタンを勝手に押しちゃ。

それじゃあ、意味が無いよ。

黒猫：大丈夫。そういうことはしないから。

作家：宏幸くんは家で留守番なのか？

受験生：なんか、シングルベルたちでチャットするって言った。

編集者：しょうがない子ねえ。

作家：なんだ、シングルベルって。

受験生：クリスマスなのにカップルじゃない人たち。

ほんとにしょうがないよね。兄ちゃん。

作家：おまえだって、彼女いないだろ。

神父：（たしなめるように）海田さん。あなたも独身だったでしょ。暫く前まで。

作家：す、すいません。

受験生：俺はいいんだよ。受験生なんだから。

編集者：宏幸も、一応受験生なのにねえ。双子なんだから。

白猫：ええっ？！

作家：そうだなあ。あいつは、どうするつもりなんだろう？

受験生：さあ。

神父：では、ミサを始めましょう。

/*ちょっと間*/

白猫：あ、クロ。戻ってきた。

おたく：（黒猫を追いかけている）ねこ——、ねこ——。

編集者：宏幸。

受験生：兄ちゃん。

作家：宏幸、ボタンは押したか？

おたく：え、ボタン？ 押したよ。たった今。

受験生：今？

黒猫：俺が、にゃおん、ってちょっとおなか見せてやったらもう、

すごい勢いで連打してたよ。

白猫：そんなことしたの？

黒猫：チャットの約束までしちゃったよ。

白猫：クロ、そんなこと出来るの。

受験生：でも、まだ付いてないよ。

神父：では、後は私だけですわね。

編集者：神父さん。

神父：私のしあわせは、この街の人たち、動物たち、みんなが幸せであることです。

我々は、みんな、どこかでつながっているのですから。

いま、ここに、皆さんの幸せを確認できて私は本当に幸せです。

では、みなさん、メリー・クリスマス。

/*神父：ボタンを押す。*/

/*イルミネーションが付く、皆 感激の声*/

おたく：なんだ、なんだ。なんなんだ？

神父：わたしは、この街のみんなにボタンを配っていたんです。

幸せを感じたとき押してください。と言って。

そして、それはこのクリスマスツリーのイルミネーションを付けるスイッチでした。今、この瞬間にそれが付きました、

そして、みんなが幸せを確認したんです。

おたく：なんだ、そんなことか。早く言ってくれればいいのに。

作家：しかし、神父さん、なんでこんな面倒なことを？

神父：実は、この教会にはひとつの伝説がありましてね。

おたく：伝説？

◆エピローグ・25日・木曜日

/*いないという演出家もいるだろうけど、

アドヴェントカレンダーを最後まで終わらせるために入れている。*/

/*客出しを始めてしまっても良い。*/

_____/*教会の外*/

黒猫：ねえ、竜太郎。あれ、どうやったの。

竜太郎：ハトさんに頼んでこの綱を結びつけてもらったんだよ。あの鐘にね。

白猫：なんだ、クリスマスの奇跡じゃないのか。

竜太郎：神父さんや街の人たちをがっかりさせたくないからね。

白猫：いい人ぶっちゃって。

竜太郎：いやあ、僕はたいしたことはしてないよ。すべてハトさんのおかげさ。

ハト：ぽっ。ぽっ。

黒猫：おう、ハトさん、お手柄。

ハト：ぽっ？何のこと？